加賀藩御定書卷十六

行狀並儉約御定書

一　諸侍若者共行儀に付被仰出

御家中諸侍若者共、惡敷友にまじはらざるやうに、常々異見可仕候。親之申がたき儀有之においては、組頭ゟ致相談、能成立候樣に可相心得旨被仰出者也。

承應三年十一月廿七日　御印　津田玄蕃
奥村因幡

二　儉約之儀被仰出に付觸

覺

一、儉約之儀、從前々雖被仰出、當春江戸就火事、彌家作等輕いたし、簡略可用之旨上意候。此般家作・衣食等之御定書有之候。乍然指而衣食之品々御構無之、不入費を省進退取續、下々に至迄憐愍を加へ〳〵つろぎ候樣にとの儀に候。當家中儉約之儀粗兼々雖申付、右上意之上猶以諸事簡略用、不入花麗一切無用候。從公儀被仰出之趣に隨ひ、今度以定書申渡通相守、進退取續候心得肝要候。并家業專に相勤、應分限人馬・武具等之嗜油斷有之間敷候。儉約にとよせ風俗を不亂、諸事作法宜樣に覺悟尤候。若ゆゑもなく進退不成族は可爲曲事候。以上。

（寛文八年）七月六日

三　拜借銀被仰付に付觸

覺

一、御家中面々、勝手方御用捨之ため、最前拜借銀被仰付刻、勝手縮申渡候得共、次第にゆるかせに罷成候由被聞召上、此度重而別紙頭書を以被仰出候事。

一、拜借銀利足一和利に候得共、迚御家中御用捨之儀に候條、向後五歩に被成被下候事。

一、今度重而拜借仕度由申者之手前、借銀・買懸高能々被遂吟味、長九郎左衞門方迄可被申斷事。

一、加樣に御用捨被仰付候上、若御定書之趣相背、勝手方不調法に仕なし候者、曲言可被仰付事。